

# 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

## Keio Associated Repository of Academic resources

Title	井田良教授略歴及び主要業績
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院法務研究科
Publication year	2017
Jtitle	慶應法学 (Keio law journal). No.37 (2017. 2) ,p.441- 487
Abstract	
Notes	井田良教授退職記念号
Genre	Article
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20170224-0441">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20170224-0441</a>

## 井田良教授 略歴及び主要業績

### 【1956年】

東京都調布市に生まれる

### 【1974年】

慶應義塾大学法学部法律学科入学

### 【1978年】

慶應義塾大学法学部法律学科卒業（卒業時表彰学生）

慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程入学

「E・シュミットホイザーの犯罪理論について」法律学研究（1978年1月）52～72頁

### 【1979年】

「正当防衛と過失殺人—防衛時に意図せずして死の結果を生じさせた行為が正当防衛とされた事例—連邦裁判所第二刑事部 1973年9月19日決定（西ドイツ刑事法事情7）」判例タイムズ386号（1979年7月）55～56頁

「強盗の既遂と終了一観念的競合の成否—連邦裁判所第三刑事部 1974年11月6日判決（西ドイツ刑事法事情10）」判例タイムズ394号（1979年10月）45～46頁

### 【1980年】

中谷瑾子教授の下で法学修士号を取得

慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程入学

ドイツ学術交流会（DAAD）の奨学生としてエアランゲン＝ニュールンベルク大学に留学〔指導教授：カール・ハインツ・ゲッセル教授〕（1982年まで）

「刑法における責任主義に関する一考察」（修士論文）

井田良（訳）宮澤浩一（監修）Heinz Müller-Dietz「プロセスとしての刑罰—刑の法定、

科刑および行刑を通しての法益保護—」法学研究 53 卷 7 号（1980 年 7 月）102～130 頁

### 【1982 年】

井田良（訳）Karl Heinz Gössel「結果的加重犯の共犯についての解釈論的考察」法学研究 55 卷 4 号（1982 年 4 月）87～108 頁

「量刑事情の範囲とその帰責原理に関する基礎的考察—西ドイツにおける諸学説の批判的検討を中心として（1）」法学研究 55 卷 10 号（1982 年 10 月）67～98 頁

「量刑事情の範囲とその帰責原理に関する基礎的考察—西ドイツにおける諸学説の批判的検討を中心として（2）」法学研究 55 卷 11 号（1982 年 11 月）34～65 頁

「量刑事情の範囲とその帰責原理に関する基礎的考察—西ドイツにおける諸学説の批判的検討を中心として（3）」法学研究 55 卷 12 号（1982 年 12 月）81～108 頁

### 【1983 年】

慶應義塾大学法学部助手

「量刑事情の範囲とその帰責原理に関する基礎的考察—西ドイツにおける諸学説の批判的検討を中心として（4）」法学研究 56 卷 1 号（1983 年 1 月）62～79 頁

「(書評) ヴィンフリート・ハッセマー（著）『刑法入門』」法学研究 56 卷 1 号（1983 年 1 月）114～121 頁

「量刑事情の範囲とその帰責原理に関する基礎的考察—西ドイツにおける諸学説の批判的検討を中心として（5・完）」法学研究 56 卷 2 号（1983 年 2 月）60～92 頁

宮澤浩一・井田良「銀行のキャッシュカードの磁気ストライプ部分が私文書偽造罪の客体に当たるとされた事例（大阪地判昭和 57 年 9 月 9 日）」判例時報 1091 号（判例評論 298 号、1983 年 12 月）214～218 頁

### 【1984 年】

慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学

「(書評) ヨアヒム・ルシュカ（著）『論理的・分析的方法による刑法』」法学研究 57 卷 1 号（1984 年 1 月）119～127 頁

中野次雄・井田良・野村二郎「裁判の誤り防ぐ道は—死刑囚再審判決をこう見る」  
朝日新聞（1984年7月12日朝刊）

金子晃・井田良（訳）Gerd Pfeiffer「ドイツ連邦通常裁判所カルテル部の判例に見る  
差別的取扱いの禁止および競争制限的契約の様式の問題について」公正取引 407  
号（1984年9月）4～13頁

井田良（訳）Arthur Kaufmann「法と言語」法学研究 57 卷 11 号（1984年11月）130  
～149頁

宮澤浩一（監訳）クラウス・ロクシン『刑法における責任と予防』（成文堂、1984年  
12月）

- ・井田良（訳）「国家の刑罰の意義と限界」〔1～47頁〕
- ・同「責任主義についての刑事政策的考察」〔49～69頁〕
- ・同「責任刑法の問題性」〔233～264頁〕

宮澤浩一・井田良「西ドイツ刑法学の現状（追録7）」法学研究 57 卷 12 号（1984年  
12月）158～98頁

### 【1985年】

井田良（訳）Arthur Kaufmann「刑罰における応報と責任」法学研究 58 卷 3 号（1985  
年3月）82～90頁

井田良（訳）Hans Joachim Hirsch「西ドイツにおける違法論をめぐる議論の現状」ジ  
ュリスト 834 号（1985年4月）83～88頁

「法学の方法」宮澤浩一・大谷實・墨谷葵・諸澤英道（編著）『法学リーディングス』  
（成文堂、1985年7月）36～60頁

「故意における客体の特定および『個数』の特定に関する一考察（1）」法学研究 58  
卷9号（1985年9月）38～55頁

「西ドイツにおけるコンピュータ犯罪への対応—諸外国の立法動向（2）（特集 コンピ  
ュータ犯罪と刑事立法）」ジュリスト 846 号（1985年10月）42～52頁

「故意における客体の特定および『個数』の特定に関する一考察（2）」法学研究 58  
卷10号（1985年10月）56～81頁

中谷瑾子・井田良・平野洋子（訳）Adolf Laufs「脳死をめぐる法律上の諸問題—1984年9月22日ドイツ神経学会における講演」判例タイムズ565号（1985年11月）11～17頁

「故意における客体の特定および『個数』の特定に関する一考察（3）」法学研究58巻11号（1985年11月）59～94頁

「故意における客体の特定および『個数』の特定に関する一考察（4・完）」法学研究58巻12号（1985年12月）52～76頁

Nowakowskis Lehre von der Rechtswidrigkeit; ein Beitrag zur Dogmengeschichte der strafrechtlichen Unrechtslehre, Keio Law Review, No. 5, 1985, S. 105-118.

## 【1986年】

慶應義塾大学法学部専任講師

井田良（訳）Hans Joachim Hirsch「西ドイツ刑法の改正は何をもたらしたか」刑法雑誌27巻1号（1986年2月）1～20頁

宮澤浩一（監訳）アルトゥール・カウフマン『法哲学と刑法学の根本問題』（成文堂、1986年3月）

・井田良（訳）「法と言語」〔95～127頁〕

・同「刑罰における応報と責任」〔171～182頁〕

「余罪について未決勾留日数の算入・通算により執行の余地のない実刑判決が確定した場合と刑法26条2号（最決昭和59年12月18日）」『昭和60年度重要判例解説』（1986年6月）152～153頁

宮澤浩一・井田良（編）『外国刑事法文献集成（3）—ドイツ全刑法学雑誌』（成文堂、1986年7月）

宮澤浩一・井田良「西ドイツ刑法学の現状（追録8）」法学研究59巻8号（1986年8月）1～32頁

阿部純二（編）『基本法コンメンタール刑法〔第3版〕』（日本評論社、1986年10月）

・宮澤浩一・井田良「通貨偽造ノ罪」〔161～165頁〕

・同「文書偽造ノ罪」〔166～174頁〕

「故意における客体の特定および『個数』の特定について」刑法雑誌 27 卷 3 号（1986 年 11 月）583 ～ 604 頁

**【1987 年】**

慶應義塾福澤基金によりケルン大学に留学〔指導教授：ハンス・ヨアヒム・ヒルシュ教授〕（1989 年まで）

安田寛・西岡朗・宮澤浩一・井田良・大場昭・小林宏晨『自衛権再考』（知識社、1987 年 1 月）  
・宮澤浩一・井田良「刑法における正当防衛」103 ～ 124 頁

福田平・宮澤浩一（監訳）Hans Joachim Hirsch『ドイツ刑法学の現代的展開』（成文堂、1987 年 2 月）  
・井田良（訳）「西ドイツ刑法の改正は何をもたらしたか」〔1 ～ 27 頁〕  
・同「違法論をめぐる議論の現状」〔29 ～ 69 頁〕  
・同「軽微犯罪の取り扱いについて」〔125 ～ 152 頁〕

「結果的加重犯における結果帰属の限界についての覚書—強盗致死傷罪を中心として」法学研究 60 卷 2 号〔田中實教授・中谷瑾子教授退職記念号〕（1987 年 2 月）237 ～ 259 頁

井田良（訳）Karl Heinz Gössel「ドイツ刑法における正犯と共犯」法学研究 60 卷 5 号（1987 年 5 月）97 ～ 120 頁

井田良（訳）Karl Heinz Gössel「刑事手続における法治国原理の意味」法学研究 60 卷 6 号（1987 年 6 月）105 ～ 120 頁

**【1988 年】**

「過失犯と目的的行為論—過失作為の行為性に関する一考察」法学研究 61 卷 2 号（1988 年 2 月）129 ～ 155 頁

井田良（訳）Karl Heinz Gössel「刑事手続における法治国原理の意味」日独法学 11 卷（1988 年 3 月）1 ～ 16 頁

「〔演習〕犯罪論における行為概念の意義と機能」法学教室 91 号（1988 年 4 月）137 頁

「〔演習〕甲は、かねてから A を毒物で殺害することを計画し好機をうかがっていたが、

ある日、Aの家に訪れた際に、Aが飲もうとするコーヒーの中にひそかに致死量をこえる毒薬を混入することに成功した。ところが、Aがコーヒーを飲み終えた後で、まったく偶然に、甲とは無関係の乙によってAは射殺された。次の各場合について、甲が殺人既遂の罪責を負うかどうかを検討せよ。

- (a) 毒が効きはじめたとき、突然、乙が部屋に侵入して来てピストルを乱射し、Aを射殺した場合。
- (b) Aが苦しきのあまり助けを求めて家の外に出たところ、Aを殺すためにやって来た乙がこれを発見し射殺した場合。」法学教室 92号（1988年5月）122頁

「西ドイツにおけるコンピュータ犯罪処罰規定とデータの保護（特集 コンピュータ犯罪とデータの保護）」刑法雑誌 28巻4号（1988年5月）591～626頁

「〔演習〕相対的応報刑論とは何か」法学教室 93号（1988年6月）116頁

「〔演習〕深夜、一人住まいの甲の家に盗みに入ろうとしたAは、トイレの小窓を開けて頭から侵入しようとしたところ、窓が小さすぎたため途中で動けない状態となった。物音に気づいて起きて来た甲に対しAは助けを求めたが、甲はこれを拒否した。甲は、数日後、すっかり衰弱したAを見て、このままでは確実に死ぬであろうと思いつつもあえてそのまま放置し、一週間後についてAは死亡するに至った。甲は、殺人罪の罪責を負うか。」法学教室 94号（1988年7月）90頁

「〔演習〕動物好きの甲は、森で野うさぎに狙いを付けているハンターAに向けて石を投げつけ、重い傷害を与えた。ところが、後に明らかになったところによると、実はAは野うさぎではなくハンターBを殺そうとしてひそかに銃を向けていたのであった。刑法上、甲の行為の違法性はどのように評価されるか。」法学教室 95号（1988年8月）86頁

「〔演習〕罪数論における構成要件の機能」法学教室 96号（1988年9月）99頁

「〔演習〕相対的非決定論とは何か」法学教室 97号（1988年10月）98頁

「〔演習〕やわらかな決定論とは何か」法学教室 98号（1988年11月）91頁

「〔演習〕消極的構成要件要素の理論とは何か」法学教室 99号（1988年12月）84頁

## 【1989年】

ドイツ・ケルン大学法学部において最優等（*summa cum laude*）の成績で法学博士

号 (Dr. jur.) を取得

「(演習) 故意は主観的違法要素か」法学教室 100 号 (1989 年 1 月) 144 頁

「(演習) わが国の刑法の特色について」法学教室 101 号 (1989 年 2 月) 83 頁

「(演習) 体系的思考と問題的思考」法学教室 102 号 (1989 年 3 月) 83 頁

堀内捷三 (著) 井田良 (原著者コメント) 「井田良『過失犯と目的的行為論—過失作為の行為性に関する一考察』」法律時報 61 卷 7 号 (1989 年 6 月) 146 ~ 150 頁

「雑感・西ドイツの刑事司法」ジュリスト 934 号 (1989 年 6 月) 16 頁

福田平・井田良 (訳) Hans Joachim Hirsch 「ヴェルツェル以降の西ドイツ刑法学 (上)」ジュリスト 934 号 (1989 年 6 月) 118 ~ 125 頁

福田平・井田良 (訳) Hans Joachim Hirsch 「ヴェルツェル以降の西ドイツ刑法学 (下)」ジュリスト 936 号 (1989 年 6 月) 130 ~ 139 頁

阿部純二 (編) 『基本法コンメンタール刑法 [第 4 版]』 (日本評論社、1989 年 10 月)  
・宮澤浩一・井田良「通貨偽造ノ罪」[158 ~ 162 頁]  
・同「文書偽造ノ罪」[163 ~ 172 頁]

**【1990 年】**

慶應義塾大学法学部助教授

井田良・小山剛 (訳) Martin Kriele 「裁判官の法発見における法律への忠実と正義」法学研究 63 卷 3 号 (1990 年 3 月) 89 ~ 110 頁

「逮捕拘留中の犯人の身代りを出頭させる行為と犯人隠避教唆罪の成否 (最決平成元年 5 月 1 日)」『平成元年度重要判例解説』 (1990 年 6 月) 162 ~ 163 頁

「(書評) 福田平 (著) 『刑法解釈学の主要問題』」ジュリスト 960 号 (1990 年 7 月) 91 頁

宮澤浩一・井田良 (監訳) Karl Heinz Gössel 『正義・法治国家・刑法—刑法・刑事訴訟法の根本問題』 (成文堂、1990 年 9 月)



- ・井田良（訳）「刑事制裁の本質と根拠」〔1～45頁〕
- ・同「弁証法のプロセスとしての刑法獲得」〔47～75頁〕
- ・同「西ドイツ刑法における正犯と共犯」〔109～151頁〕
- ・同「連邦裁判所の判例における承継的共同正犯の問題」〔153～179頁〕
- ・同「刑事手続における法治国原理の意味」〔181～207頁〕

「刑事政策と弁護士の役割（特集 わが国の刑事政策と弁護士の役割）」自由と正義 41 卷 9 号（1990 年 9 月）13～18 頁

「故意なき者に対する教唆犯は成立しうるか」慶應義塾大学法学部（編）『慶應義塾大学法学部法律学科開設百年記念論文集 法律学科篇』（1990 年 9 月）473～496 頁

「違法性における結果無価値と行為無価値—いわゆる偶然防衛をめぐって（1）」法学研究 63 卷 10 号（1990 年 10 月）1～26 頁

「違法性における結果無価値と行為無価値—いわゆる偶然防衛をめぐって（2・完）」法学研究 63 卷 11 号（1990 年 11 月）58～90 頁

### 【1991 年】

「覚せい剤輸入罪および所持罪における覚せい罪であることの認識の程度（最決平成 2 年 2 月 9 日）」判例時報 1367 号（判例評論 384 号、1991 年 2 月）213～217 頁

「法学の方法」宮澤浩一・大谷實・墨谷葵・諸澤英道（編著）『法学リーディングス〔第 2 版〕』成文堂（1991 年 4 月）34～58 頁

「因果関係の錯誤（大判大正 12 年 4 月 30 日）」『刑法判例百選 I 総論〔第 3 版〕』（1991 年 4 月）34～35 頁

「（時の判例）第三者の暴行によって被害者の死期が早められた場合の因果関係（最決平成 2 年 11 月 20 日）」法学教室 128 号（1991 年 5 月）90～91 頁

「ドイツの法律家たちとドクトル・ユーリス—ドイツにおける法曹教育制度の一断面」刑法雑誌 31 卷 4 号（1991 年 5 月）565～571 頁

「リスト Franz v. Liszt（1851～1919）—開かれた刑法学を求めて闘った情熱の人（ドイツ刑法学者のプロフィール 3）」法学教室 129 号（1991 年 6 月）62～63 頁

〔書評〕前田雅英（著）『刑法演習講座』法学教室 131 号（1991 年 8 月）49 頁

井田良（訳）Hans Joachim Hirsch「国境を越えた刑法学の可能性」法学研究 64 卷 8 号（1991 年 8 月）1～19 頁

〔ベーリング Ernst Beling（1866～1932）—構成要件論を生んだ独創的理論家（ドイツ刑法学者のプロフィール 6）〕法学教室 132 号（1991 年 9 月）50～51 頁

〔再論・故意なき者に対する教唆犯は成立しうるか—山中敬一教授の批判に答えて〕法律時報 63 卷 10 号（1991 年 9 月）78～81 頁

〔因果関係の『相当性』に関する一試論〕法学研究 64 卷 11 号（1991 年 11 月）1～32 頁

〔ロクシン Claus Roxin（1931～）—犯罪論の新時代を切り開いた独創的理論家（ドイツ刑法学者のプロフィール 9）〕法学教室 135 号（1991 年 12 月）60～61 頁

Die heutige japanische Diskussion über das Straftatsystem. Eine kritische Untersuchung unter besonderer Berücksichtigung der Entwicklung der deutschen Strafrechtswissenschaft, Berlin: Duncker & Humblot, 1991, 178 S.（博士論文〔ケルン大学提出〕を出版補助を得て出版したもの）

### 【1992 年】

〔正犯概念（特集 刑法総論の新論点）〕法学教室 137 号（1992 年 2 月）27～28 頁

〔M. E. マイヤー Max Ernst Mayer（1875～1923）—薄幸の理論刑法学者（ドイツ刑法学者のプロフィール 12）〕法学教室 138 号（1992 年 3 月）58～59 頁

〔権限の内部的制限と有価証券偽造罪（最決昭和 43 年 6 月 25 日）〕『刑判判例百選Ⅱ各論〔第 3 版〕』（1992 年 4 月）172～173 頁

〔違法性阻却事由〔35 条、36 条、37 条〕（特集 条文からスタート刑法）〕法学教室 140 号（1992 年 5 月）24～25 頁

〔市民生活と法意識—犯罪への対応に見る日独文化比較（特集 市民生活に見るドイツ人像）〕基礎ドイツ語 43 卷 1 号（1992 年 5 月）62～63 頁

「エンギッシュ Karl Engisch (1899~1990) —鋭利・緻密な問題分析を示した法理論の巨匠 (ドイツ刑法学者のプロフィール 15)」法学教室 141 号 (1992 年 6 月) 80 ~ 81 頁

「複数の建物が廻廊等により接続されていた神社社殿が 1 個の現住建造物に当たるとされた事例 (最決平成元年 7 月 14 日)」警察研究 63 卷 6 号 (1992 年 6 月) 52 ~ 60 頁

井田良・加藤克佳 (訳) Ulfrid Neumann 「刑事手続における実体的正義と手続的正義」法学研究 65 卷 6 号 (1992 年 6 月) 101 ~ 124 頁

井田良 (著) 岡上雅美 (原著者コメント) 「岡上雅美『ドイツにおける『法秩序の防衛』概念の展開について』」法律時報 64 卷 9 号 (1992 年 8 月) 81 ~ 86 頁

「フランク Reinhard Frank (1860~1934) —『フランクの注釈書』と『フランクの公式』 (ドイツ刑法学者のプロフィール 18)」法学教室 144 号 (1992 年 9 月) 74 ~ 75 頁

井田良 (訳) Hans Joachim Hirsch 「刑法改正と犯罪論—総則規定の改正における主要問題」法学研究 65 卷 9 号 (1992 年 9 月) 91 ~ 108 頁

「共犯の処罰根拠 (特集 共犯に関する諸問題)」受験新報 42 卷 10 号 (1992 年 10 月) 40 ~ 41 頁

井田良・山名京子 (訳) Gunther Arzt 「自白と刑事司法システム」法学研究 65 卷 10 号 (1992 年 10 月) 129 ~ 146 頁

「マウラッハ Reinhart Maurach (1902~1976) —波瀾の生涯、浩瀚な体系書、『行為答責』の理論 (ドイツ刑法学者のプロフィール 21)」法学教室 147 号 (1992 年 12 月) 50 ~ 51 頁

「被教唆者の客体の錯誤と教唆者の故意—ドイツ連邦裁判所 1990 年 10 月 25 日判決をめぐって」法学研究 65 卷 12 号 (1992 年 12 月) 43 ~ 67 頁

## 【1993 年】

井田良 (訳) Thomas Weigend 「ドイツ統一と刑事司法」刑法雑誌 33 卷 1 号 (1993 年 2 月) 46 ~ 57 頁

「ドーナ Alexander Graf zu Dohna (1876~1944) —時流に影響されず孤高に法哲学的思索を重ねた人 (ドイツ刑法学者のプロフィール 24)」法学教室 150 号 (1993 年 3 月) 30 ~ 31 頁

「デパートの火災事故と管理・監督過失—大洋デパート事件最高裁判決 (最判平成 3 年 11 月 14 日)」『判例セレクト'92 (法学教室 150 号別冊付録)』(1993 年 3 月) 37 頁

「放火罪をめぐる最近の論点」阿部純二・板倉宏・内田文昭・香川達夫・川端博・曾根威彦 (編)『刑法基本講座 (第 6 卷) 各論の諸問題』(法学書院、1993 年 5 月) 182 ~ 201 頁

「目的的行為論と犯罪理論」福田雅章・名和鐵郎・村井敏邦・篠田公穂・橋本正博 (編)『福田平博士・大塚仁博士古稀祝賀 刑事法学の総合的検討 (上)』(有斐閣、1993 年 9 月) 15 ~ 44 頁

「強盗致死傷罪」阿部純二・板倉宏・内田文昭・香川達夫・川端博・曾根威彦 (編)『刑法基本講座 (第 5 卷) 財産犯論』(法学書院、1993 年 10 月) 127 ~ 151 頁

「大規模火災事故における管理・監督責任と刑事過失論」法学研究 66 卷 11 号 (1993 年 11 月) 1 ~ 35 頁

「憲法の番人としての連邦憲法裁判所 (特集 ドイツと日本—その社会制度)」基礎ドイツ語 44 卷 8 号 (1993 年 12 月) 52 ~ 53 頁

## 【1994 年】

法学部法律学科開設 100 年記念国際シンポジウム委員会 (編)『21 世紀における法の課題と法学の使命』(1994 年 2 月)

- ・井田良 (訳) Heike Jung 「21 世紀における刑法と刑事科学—新たなる展開か、『あまり何も変わらない』か—」[227 ~ 261]
- ・宮澤浩一 (司会)・加藤久雄・中谷瑾子・井田良・Lucius Calfish・ブアマイスター・Stefan Trechsel・渥美東洋「討論」[271 ~ 286 頁]

「過失行為と死亡結果との間に他人の不適切な行動が介在した場合の因果関係 (最判平成 4 年 12 月 7 日)」『判例セレクト' 93 (法学教室 162 号別冊付録)』(1994 年 3 月) 32 頁

「責任と刑罰—自由と非決定性との狭間で」Popper Letters 6 卷 1 号（1994 年 6 月）7  
～ 9 頁

「犯罪論体系と構成要件概念—違法類型説の立場から」法学教室 166 号（1994 年 7 月）  
20 ～ 25 頁

「臍物罪（リレー連載・刑法各論 24）」法学セミナー 477 号（1994 年 9 月）94 ～ 99  
頁

「構成要件該当事実の錯誤」阿部純二・板倉宏・内田文昭・香川達夫・川端博・曾根  
威彦（編）『刑法基本講座（第 2 卷）構成要件論（錯誤・過失を含む）』（法学書院、  
1994 年 10 月）227 ～ 260 頁

園田寿・荒川雅行・井田良『刑事法講義ノート』（慶應通信、1994 年 10 月）  
・「刑法各論」[96 ～ 234 頁]

「カール・ポパーの非決定論と刑事責任論」Popper Letters 6 卷 2 号（1994 年 11 月）  
23 ～ 28 頁

## 【1995 年】

慶應義塾大学法学部教授

「（時の判例）窃盗犯人が所有者以外の者の占有する財物を窃取した場合における親  
族相盗例（刑法 244 条 1 項）の適用の要件（最決平成 6 年 7 月 19 日）」法学教室  
173 号（1995 年 2 月）134 ～ 135 頁

「暴行により傷害を受けた被害者が脳死状態になった後、人工呼吸器を取り外されて  
心臓死に至った場合における因果関係（大阪地判平成 5 年 7 月 9 日）」『判例セレ  
クト'94（法学教室 174 号別冊付録）』（1995 年 3 月）31 頁

『犯罪論の現在と目的的行為論』（成文堂、1995 年 3 月）

「注意義務をめぐる諸問題（特集 監督過失—火災事故判例を中心に）」刑法雑誌 34 卷  
1 号（1995 年 3 月）95 ～ 112 頁

『CD レッスン刑法入門』（慶應通信、1995 年 5 月）

西原春夫・新倉修・山口厚・井田良・松宮孝明（編著）『刑法マテリアルズ』（柏書房、1995年6月）

- ・井田良・長井長信「錯誤」
- ・「錯誤の意義とその種類」〔202頁〕
- ・「事実の錯誤」〔203～218頁〕

「ドイツにおける日数罰金制」齊藤誠二・佐藤司・神山敏雄・筑間正泰（編）『変動期の刑事法学—森下忠先生古稀祝賀（下）』（成文堂、1995年7月）703～728頁

「犯罪論と刑事法学の歩み—戦後50年の回顧と展望（特集 戦後50年—学説の形成と発展）」法学教室179号（1995年8月）14～23頁

「犯罪者は『他者』か？」三田評論973号（1995年10月）84頁

阿部純二（編）『基本法コンメンタール 改正刑法』（日本評論社、1995年10月）

- ・宮澤浩一・井田良「通貨偽造の罪」〔183～188頁〕
- ・同「文書偽造の罪」〔189～200頁〕
- ・同「有価証券偽造の罪」〔201～203頁〕

「日数罰金制（ワークショップ）」刑法雑誌35巻1号（1995年11月）151～153頁

『基礎から学ぶ刑事法』（有斐閣、1995年12月）

町野朔・中森喜彦（編）『刑法1 総論』（有斐閣、1995年12月）

- ・「共犯」〔172～221頁〕
- ・「罪数」〔222～229頁〕

Die Stellung von Rechtfertigung und Entschuldigung im System der Strafbarkeitsvoraussetzungen - Ein Kommentar aus japanischer Sicht -, in: Albin Eser/Haruo Nishihara (Hrsg.), Rechtfertigung und Entschuldigung IV, Freiburg, Eigenverlag Max-Planck-Institut, 1995, S. 93-97.

Umweltschutz durch das Strafrecht? Japanische Erfahrungen, in: Hans-Heiner Kühne/Koichi Miyazawa (Hrsg.), Neue Strafrechtsentwicklungen im deutsch-japanischen Vergleich, Köln:Heymann, 1995, S. 127-142.

Strafrechtliche Haftung von Leitungsorganen in Japan, Keio Law Review, No. 8, 1995, S. 63-

73.

**【1996年】**

フンボルト財団の奨学金を得て、エアランゲン＝ニュールンベルク大学に研究滞在  
(～1997年)

「量刑理論の体系化のための覚書」法学研究 69 巻 2 号〔宮澤浩一教授退職記念号〕  
(1996年2月) 293～317頁

「基礎から学ばされた刑事法」書齋の窓 452 号 (1996年3月) 16～21頁

「数人が共同して防衛行為としての暴行に及び、一部の者の行為が過剰防衛となった場合に、他の者については正当防衛の成立を認めた事例 (最判平成6年12月6日)」『判例セレクト'95 (法学教室 186 号別冊付録)』(1996年3月) 34頁

「刑法と道徳 (ケーススタディ刑法〔第1回])」法学セミナー 497 号 (1996年5月)  
82～87頁

「(時の話題) 少数異見 死刑制度の存廃をめぐって」三田評論 981 号 (1996年6月)  
38～39頁

「盗品に関する罪」芝原邦爾・堀内捷三・西田典之 (編)『刑法理論の現代的展開 各論』(日本評論社、1996年6月) 253～268頁

園田寿・井田良・加藤克佳『刑事法講義ノート〔第2版)』(慶應義塾大学出版会、  
1996年6月)  
・「刑法各論」〔119～276頁〕

「因果関係 (ケーススタディ刑法〔第3回])」法学セミナー 499 号 (1996年7月) 80  
～84頁

「事実の錯誤 (ケーススタディ刑法〔第5回])」法学セミナー 501 号 (1996年9月)  
92～97頁

「正当防衛 (ケーススタディ刑法〔第7回])」法学セミナー 503 号 (1996年11月)  
82～86頁

**【1997年】**

「違法性の錯誤（ケーススタディ刑法〔第9回〕）」法学セミナー 505号（1997年1月）  
94～98頁

井田良（訳）Thomas Weigend「ドイツの刑事手続における隠密捜査官と情報提供者」  
刑法雑誌 36巻2号（1997年2月）221～240頁

「正犯と共犯（ケーススタディ刑法〔第11回〕）」法学セミナー 507号（1997年3月）  
88～92頁

「因果関係の錯誤（大判大正12年4月30日）」『刑法判例百選Ⅰ 総論〔第4版〕』  
（1997年4月）32～33頁

「権限の内部的制限と有価証券偽造罪（最決昭和43年6月25日）」『刑法判例百選Ⅱ  
各論〔第4版〕』（1997年5月）178～179頁

井田良・丸山雅夫『ケーススタディ刑法』（日本評論社、1997年11月）

「臓器移植法と死の概念」法学研究 70巻12号（1997年12月）199～223頁

Umweltstrafrecht in Japan, Zeitschrift für Japanisches Recht, 2. Jahrgang 1997, Heft 4, S. 116-  
128.

Strafrechtliche Haftung von Leitungsorganen in Japan, in: Jan Grotheer/Matthias K. Scheer  
(Hrsg.), Japanische Direktinvestitionen in Deutschland und deutsche Direktinvestitionen in  
Japan, 1997, S. 233-248.

**【1998年】**

司法試験考査委員（2004年まで）

「脳死説の再検討」西原春夫先生古稀祝賀論文集編集委員会（編）『西原春夫先生古  
稀祝賀論文集（第三巻）』（成文堂、1998年3月）43～58頁

「（書評）山口厚（著）『問題探究 刑法総論』」法学教室 213号（1998年6月）120頁

「刑法108条の現住建造物に当たるとされた事例（最決平成9年10月21日）」『平成  
9年度重要判例解説』（1998年6月）163～164頁



長井圓・井田良（訳）Albin Eser 「ドイツの新臓器移植法（上）」ジュリスト 1138 号  
（1998 年 7 月）87～92 頁

井田良・金子文子（訳）Hans Joachim Hirsch 「客観的帰属論批判（上）」法学研究 71  
巻 7 号（1998 年 7 月）81～96 頁

「住居侵入罪（特集 判例で学ぶ刑法各論）」法学教室 215 号（1998 年 8 月）9～11 頁

長井圓・井田良（訳）Albin Eser 「ドイツの新臓器移植法（下）」ジュリスト 1140 号  
（1998 年 9 月）125～130 頁

井田良・金子文子（訳）Hans Joachim Hirsch 「客観的帰属論批判（下）」法学研究 71  
巻 9 号（1998 年 9 月）107～122 頁

「公職選挙法の寄附禁止違反の罪と受寄附者における認識の内容（最決平成 9 年 4 月  
7 日）」判例時報 1649 号（判例評論 477 号、1998 年 11 月）238～241 頁

Strafrechtliche Verantwortlichkeit von Juristischen Personen in Japan, in: Andrzej J. Szwarc/  
Andrzej Wasek (Hrsg.), Das erste deutsch-japanisch-polnische Strafrechtsskolloquium, 1998,  
S. 193-205.

Strafrechtliche Verantwortung für fehlerhafte Produkte in Japan, in: Jan Grotheer/Matthias K.  
Scheer (Hrsg.), Produkthaftung in Deutschland und Japan, 1998, S. 115-135.

Strafrechtliche Produkthaftung in Japan, in: Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, Band  
116, 1998, S. 252-272.

## 【1999 年】

「(書評) 市川正人・酒巻匡・山本和彦（著）『現代の裁判』」書齋の窓 481 号（1999  
年 2 月）50～53 頁

「生命維持治療の限界と刑法」法曹時報 51 巻 2 号（1999 年 2 月）1～25 頁

「刑法判例の読み方－刑法と判例と学説（特集 判例の読み方）」法学教室 222 号  
（1999 年 3 月）16～23 頁

「結果無価値と行為無価値（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 1 回〕）」

現代刑事法1号(1999年5月)81～87頁

「行為論の意義と機能(講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第2回])」現代刑事法2号(1999年6月)76～84頁

「不真正不作為犯(講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第3回])」現代刑事法3号(1999年7月)87～95頁

「因果関係の理論(講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第4回])」現代刑事法4号(1999年8月)61～70頁

「故意をめぐる諸問題(講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第5回])」現代刑事法1巻5号(1999年9月)97～107頁

阿部純二(編)『基本法コンメンタール 改正刑法〔第2版〕』(日本評論社、1999年9月)

- ・宮澤浩一・井田良「通貨偽造の罪」〔183～188頁〕
- ・同「文書偽造の罪」〔189～200頁〕
- ・同「有価証券偽造の罪」〔201～204頁〕

井田良・野村和彦(訳)Udo Jesionek「オーストリア刑法におけるダイバージョン」法学研究72巻9号(1999年9月)71～87頁

「具体的事実の錯誤(講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第6回])」現代刑事法6号(1999年10月)87～96頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広瀬清吾・水島朝穂(編)『三省堂新六法 平成12年版』(三省堂、1999年10月)〔刑法編、刑事訴訟法編、裁判法編、健康・医事法編の編集と解説を担当。以降も同様。なお、裁判法編のみ平成16年版まで〕

井田良(司会)・金子郁容・倉八順子・河野哲也「(座談会)コミュニケーション・スキルとは何か」三田評論1018号(1999年11月)6～19頁

「抽象的事実の錯誤(講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第7回])」現代刑事法7号(1999年11月)95～102頁

井田良・島岡まな「刑法（特集 1999 年学界回顧）」法律時報 71 卷 13 号（1999 年 12 月）41～49 頁

「過失犯の基礎理論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 8 回〕）」現代刑事法 8 号（1999 年 12 月）72～80 頁

Inhalt und Funktion der Norm beim fahrlässigen Erfolgsdelikt, Thomas Weigend/Georg Küpper (Hrsg.), Festschrift für Hans Joachim Hirsch, Berlin: Gruyter, 1999, S. 225-240.

Funktion und Stellung der strafrechtlichen Sanktionen in der heutigen Gesellschaft, Zeitschrift für Japanisches Recht, 4. Jahrgang 1999, Heft 7, S. 63-72.

## 【2000 年】

日本刑法学会理事（現在に至る）

川端博・日高義博・井田良「(鼎談) 正当防衛の正当化の根拠と成立範囲（特集・正当防衛論）」現代刑事法 9 号（2000 年 1 月）4～27 頁

「違法性阻却事由の理論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 9 回〕）」現代刑事法 9 号（2000 年 1 月）82～90 頁

「違法性阻却事由の錯誤（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 10 回〕）」現代刑事法 10 号（2000 年 2 月）95～102 頁

中谷瑾子・井田良『新・刑法各論』（慶應義塾大学出版会、2000 年 2 月）

「正当防衛論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 11 回〕）」現代刑事法 11 号（2000 年 3 月）84～92 頁

「緊急避難の理論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 12 回〕）」現代刑事法 12 号（2000 年 4 月）100～108 頁

「過失犯の問題点—過失犯における危険の引受けを中心に（ワークショップ）」刑法雑誌 39 卷 3 号（2000 年 4 月）119～123 頁

「(書評) 西田典之(著)『刑法各論』」法学教室 236 号（2000 年 5 月）59 頁

「緊急避難の本質をめぐって」宮澤浩一先生古稀祝賀論文集編集委員会（編）『宮澤浩一先生古稀祝賀論文集（第2巻）刑法理論の現代的展開』（成文堂、2000年5月）273～293頁

「被害者の同意（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第13回〕）」現代刑事法14号（2000年6月）86～94頁

「テキストの周辺—『新・刑法各論』」三色旗628号（2000年7月）13～17頁

伊東研祐・井田良「（対談）法科大学院構想と刑法教育（特集 法科大学院構想と法学教育）」法律時報72巻8号（2000年7月）36～48頁

「安楽死と尊厳死（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第14回〕）」現代刑事法15号（2000年7月）81～89頁

「責任論の基礎（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第15回〕）」現代刑事法16号（2000年8月）83～90頁

「インサイダー取引（特集 経済刑法の現代的諸問題）」法学教室240号（2000年9月）12～15頁

「責任要素の理論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第16回〕）」現代刑事法18号（2000年10月）94～101頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）『三省堂新六法 平成13年版』（三省堂、2000年10月）

「所得税法244条1項にいう『使用人その他の従業者』の意義および『使用人その他の従業者』の身分のない者による所得税は脱の共同正犯の成否（最決平成9年7月9日）」ジュリスト1187号（2000年10月）109～112頁

野田進・松井茂紀（編）『シネマで法学』（有斐閣、2000年11月）

・「刑事裁判における正義—『評決のとき』」〔230～246頁〕

・「誤判はなぜなくせないか—『ショーシャンクの空に』」〔247～262頁〕

・「刑罰という名の殺人—『デッドマン・ウォーキング』」〔263～276頁〕

西田典之・山口厚（編）『刑法の争点〔第3版〕（法律学の争点シリーズ1）』（2000

年 11 月)

- ・「危険の引受け」〔78～79 頁〕
- ・「処分行為（交付行為）の意義」〔174～175 頁〕

井田良・島岡まな「刑法（特集 2000 年学界回顧）」法律時報 72 卷 13 号（2000 年 12 月）46～55 頁

「未遂犯と実行の着手（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 17 回〕）」現代刑事法 20 号（2000 年 12 月）82～88 頁

Organisations- und Aufsichtsfährlässigkeit im japanischen Strafrecht, Keio Law Review, No. 9, 2000, S. 59-66.

Vom Unterschichts- zum Oberschichtsstrafrecht. Kommentar aus japanischer Sicht. Ausweg aus dem Dilemma?, in: Kühne/Miyazawa, Alte Strafrechtsstrukturen und neue gesellschaftliche Herausforderungen in Japan und Deutschland, Berlin: Duncker & Humblot, 2000, S. 37-39.

Gentechnik und Todeszeitpunkt, in: Kühne/Miyazawa, Alte Strafrechtsstrukturen und neue gesellschaftliche Herausforderungen in Japan und Deutschland, Berlin: Duncker & Humblot, 2000, S. 133-135.

## 【2001 年】

「新春随想—批判とステレオタイプ」警察公論 56 卷 1 号（2001 年 1 月）9～12 頁

「量刑理論と量刑事情（特集 量刑の基準と理念）」現代刑事法 21 号（2001 年 1 月）35～43 頁

「〔書評〕三井誠・曾根威彦・瀬川晃（編）『入門 刑事法』」法学教室 245 号（2001 年 2 月）8 頁

「不能犯論と危険概念（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 18 回〕）」現代刑事法 23 号（2001 年 3 月）100～108 頁

「中止犯（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 19 回〕）」現代刑事法 25 号（2001 年 5 月）95～103 頁

「正犯と共犯（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第20回〕）」現代刑事  
法 26号（2001年6月）105～115頁

「薬害エイズ帝京大学病院事件第一審無罪判決をめぐって（東京地判平成13年3月  
28日）」ジュリスト 1204号（2001年7月）26～38頁

「（書評）斎藤信治（著）『刑法各論』」法学教室 252号（2001年9月）68頁

「共犯の処罰根拠と従属性（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第21回〕）」  
現代刑事法 29号（2001年9月）116～123頁

山口厚・井田良・佐伯仁志『理論刑法学の最前線』（岩波書店、2001年9月）

- ・「コメント（因果関係論）」〔44～55頁〕
- ・「違法性阻却の構造とその実質的原理」〔57～75頁〕
- ・「コメント（故意・錯誤論）」〔131～138頁〕
- ・「コメント（原因において自由な行為）」〔154～162頁〕
- ・「危険犯の理論」〔171～193頁〕
- ・「コメント（共同正犯の基本問題）」〔227～234頁〕

「法科大学院における刑法教育—司法制度改革審議会意見書の基本構想の具体化（緊  
急特別企画・法科大学院構想と刑事法教育）」現代刑事法 30号（2001年10月）71  
～77頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）  
『三省堂新六法 平成14年版』（三省堂、2001年10月）

「原因において自由な行為（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第22回〕）」  
現代刑事法 31号（2001年11月）112～120頁

「共犯と身分（特集 共犯の論点）」法学教室 255号（2001年12月）26～32頁

Welche neuen praxisrelevanten Ergebnisse bringen die gegenwärtig zum materiellen Strafrecht  
diskutierten neuen systematischen Konzepte?, in: Hans Joachim Hirsch (Hrsg.), Krise des  
Strafrechts und der Kriminalwissenschaften?, Berlin: Duncker & Humblot, 2001, S. 137-147.

Vorverlegung der Strafbarkeit im Bereich von Vorbereitung und Versuch unter besonderer  
Berücksichtigung moderner Gefährdungstatbestände, Albin Eser/Keiichi Yamanaka (Hrsg.),

Einflüsse deutschen Strafrechts auf Polen und Japan, 2001, S. 91-98.

**【2002年】**

「〔基調報告〕刑事系のカリキュラム・モデル案（法科大学院のカリキュラム・教育方法を考える（上） 第三者評価基準の観点から）」NBL728号（2002年1月）17～21頁

石川敏行・磯村保・井田良・伊藤眞・奥田隆文・片木晴彦・川端和治・合田隆史・田口守一・田中成明・永田眞三郎・長谷部恭男・樋渡利秋・房村精一・諸石光熙「パネルディスカッション（法科大学院のカリキュラム・教育方法を考える（下） 第三者評価基準の観点から）」NBL729号（2002年1月）8～34頁

「共同正犯の基礎理論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第23回〕）」現代刑事法34号（2002年2月）106～112頁

「過失犯とは何を罰するものか—過失行為における意思と意識内容（特集『人の意思』から刑法を学ぶ）」法学セミナー567号（2002年3月）16～20頁

「共同正犯の構成要件（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第24回〕）」現代刑事法36号（2002年4月）110～116頁

『基礎から学ぶ刑事法〔第2版〕』（有斐閣、2002年4月）

「教唆犯と幫助犯（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第25回〕）」現代刑事法38号（2002年6月）111～117頁

「生命倫理の領域における法規制（第17回総会シンポジウム記録〈生命倫理〉の現代—比較のなかのドイツ—）」ドイツ研究33・34号（2002年6月）13～18頁

『刑法各論（論点講義シリーズ）』（弘文堂、2002年8月）

「共犯と身分（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第26回〕）」現代刑事法41号（2002年9月）104～111頁

「〔書評〕佐久間修（著）『事例解説 現代社会と刑法』」法学教室265号（2002年10月）102頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）  
『三省堂 新六法 平成 15 年版』（三省堂、2002 年 10 月）

「共犯に関する諸問題（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 27 回〕）」  
現代刑事法 43 号（2002 年 11 月）110～116 頁

「結果的加重犯の理論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第 28 回〕）」  
現代刑事法 44 号（2002 年 12 月）105～111 頁

Fragen der Sterbehilfe im japanischen Strafrecht, in: Dieter Dölling/Volker Erb (Hrsg.),  
Festschrift für Karl Heinz Gössel zum 70. Geburtstag, Heidelberg: Müller, 2002, S. 383-  
388.

Strafrechtliche Probleme der Todesbestimmung in Japan, in: Reinhard Moos (Hrsg.),  
Festschrift für Udo Jesionek zum 65. Geburtstag, Wien: Neuer Wissenschaftlicher Verlag,  
2002, S. 339-348.

### 【2003 年】

司法修習委員会幹事（現在に至る〔2015 年から幹事長〕）

「暑く、熱い 1 週間—夏期スクーリングを終えて」三色旗 658 号（2003 年 1 月）66  
～ 68 頁

井田良・川端博「(対談) 中止犯論の現在と課題（特集・中止犯論の現在）」現代刑  
事法 45 号（2003 年 1 月）4～28 頁

「特集 最近の刑事立法の動きとその評価—刑事実体法を中心に」法律時報 75 巻 2 号  
（2003 年 2 月）

・「刑事立法の活性化とそのゆくえ—本特集の趣旨」〔4～6 頁〕

・「危険運転致死傷罪の立法論的・解釈論的検討」〔31～36 頁〕

「犯罪論をめぐる学説と実務—ドイツの状況を中心として」廣瀬健二・多田辰也（編）  
『田宮裕博士追悼論集（下巻）』（信山社、2003 年 2 月）535～561 頁

「脳死判定と治療義務の限界—臓器移植法が意味するもの」今日の移植（日本医学館）  
16 巻 2 号（2003 年 3 月）179～182 頁



三井誠・町野朔・曾根威彦・中森喜彦・吉岡一男・西田典之（編）『刑事法辞典』（信山社、2003年3月）〔執筆部分：「既遂」（104頁）、「幻覚犯」（209頁）、「行為」（228頁）、「社会的行為論」（369頁）、「ペーリング」（700頁）、「メツガー」（758頁）、「目的的行為論」（762頁）〕

指宿信・井田良・夏井高人・山野日章夫（監修）いしかわまりこ・村井のり子・藤井康子（著）『リーガル・リサーチ』（日本評論社、2003年3月）

町野朔・中森喜彦（編）『刑法1総論〔第2版〕』（有斐閣、2003年4月）  
・「共犯」〔168～217頁〕  
・「罪数」〔218～225頁〕

「予見可能性の意義（1）—北大電気メス事件（札幌高判昭和51年3月18日）」『刑  
法判例百選Ⅰ 総論〔第5版〕』（2003年4月）100～101頁

「建造物侵入の意義（仙台高判平成6年3月31日）」『刑法判例百選Ⅱ 各論〔第5版〕』  
（2003年4月）32～33頁

「過失犯における『注意義務の標準』をめぐって（特集 薬害と過失）」刑法雑誌42  
巻3号（2003年4月）53～66頁

「不作為犯と未遂論・共犯論（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第29  
回〕）」現代刑事法49号（2003年5月）99～105頁

「罪数と犯罪競合（講座・刑法総論の基礎 犯罪論の思考と論理〔第30回・最終回〕）」  
現代刑事法50号（2003年6月）86～104頁

「臓器移植法のインプリケーション」『21世紀における刑事規制のゆくえ—中谷瑾子  
先生傘寿祝賀』（現代法律出版、2003年6月）260～275頁

財団法人日本法律家協会法曹養成問題委員会（編）『法科大学院を中核とする法曹養  
成制度の在り方』（商事法務、2003年6月）〔田尾桃二、青山善充、石川敏行、井  
田良、奥田隆文、柏木昇、佐藤文哉、多賀秀一、房村精一、柳田幸男、山本和彦、  
吉田博視の共著〕

「併合罪と量刑—『新潟女性監禁事件』最高裁判決をめぐって（最判平成15年7月  
10日）」ジュリスト1251号（2003年9月）74～81頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）  
『三省堂新六法 平成 16 年版』（三省堂、2003 年 10 月）

Einführende Bemerkungen, in: Hirokazu Kawaguchi/Kurt Seelmann (Hrsg.), Rechtliche und ethische Fragen der Transplantationstechnologie in einem interkulturellen Vergleich, ARSP-Beiheft 86, 2003, S. 9-11.

Strafrechtliche Probleme der Todesbestimmung in Japan, in: Hirokazu Kawaguchi/Kurt Seelmann (Hrsg.), Rechtliche und ethische Fragen der Transplantationstechnologie in einem interkulturellen Vergleich, ARSP-Beiheft 86, 2003, S. 107-115.

Strafrechtliche Haftung für Bilanzfälschung, Marktmanipulation und fehlerhafte Publizität aus japanischer Sicht, Zeitschrift für Japanisches Recht, 9. Jahrgang 2003, Heft 16, S. 177-188.

#### 【2004 年】

慶應義塾大学大学院法務研究科教授

慶應義塾志木高等学校校長（2006 年まで）

文化庁・宗教法人審議会委員（2013 年まで〔2011 年から会長〕）

「最近の犯罪情勢の変化とその統計的把握—平成 15 年版犯罪白書をどう読むか（特集 変貌する凶悪犯罪とその対策—平成 15 年版犯罪白書を読む）」法律のひろば 57 巻 1 号（2004 年 1 月）11～17 頁

「最近における刑事立法の活性化とその評価—ドイツとの比較を中心に（特集 刑事立法の新動向と実体刑法の在り方）」刑法雑誌 43 巻 2 号（2004 年 1 月）268～281 頁

井田良・丸山雅夫『ケーススタディ刑法〔第 2 版〕』（日本評論社、2004 年 2 月）

竹花豊・河村博・杉村壽孝・宮澤浩一・井田良「（座談会）『治安の悪化』にどう対応するか」三田評論 1066 号（2004 年 3 月）10 頁～23 頁

「判例の動き—刑法」『判例セレクト 2003（法学教室 282 号別冊付録）』（2004 年 3 月）25～26 頁

「脳死と臓器移植法をめぐる最近の法的諸問題（特集 臓器移植法の現状と課題）」ジュリスト 1264 号（2004 年 3 月）12～21 頁

「いわゆる違法二元論をめぐる一考察」岡本勝・小田中聰樹・川端博・田中輝和（編）『刑事法学の現代的課題 阿部純二先生古稀祝賀論文集』（第一法規、2004年3月）123～142頁

小林充・原田國男・岡上雅美・井田良「(座談会)『量刑判断の実際』と量刑理論」法律時報76巻4号(2004年4月)67～86頁

「(書評)佐久間修(著)『最先端法領域の刑事規制—医療・経済・IT社会と刑法—』」現代刑事法6巻5号(2004年5月)90～91頁

「法科大学院の授業はどうなるのか?—刑事法(特集 法学部・法科大学院の授業案内)」法学セミナー593号(2004年5月)62～63頁

町野朔・長井圓・山本輝之(編)『臓器移植法改正の論点』(信山社、2004年5月)  
・長井圓・井田良(訳)アルピン・エーザー「ドイツの新臓器移植法」[173～198頁、初出:ジュリスト1138号・1140号]  
・「脳死説の再検討」[249～264頁、初出:西原春夫先生古稀祝賀論文集(第三巻)]  
・「生命維持治療の限界と刑法」[265～285頁、初出:法曹時報51巻2号]

野田進・松井茂紀(編)『シネマで法学〔新版〕』(有斐閣、2004年5月)  
・「誤判はなぜなくせないか—『ショーシャンクの空に』」[261～276頁]  
・「刑罰という名の殺人—『デッドマン・ウォーキング』」[277～290頁]

「緊急権の法体系上の位置づけ(特集 刑事法と民事法の相関)」現代刑事法6巻6号(2004年6月)4～14頁

「殺人罪処罰規定の国際比較(第40回日本犯罪学会総会報告 シンポジウム 殺人をめぐる最近の話題と動向)」犯罪学雑誌70巻3号(2004年6月)80～82頁

「中谷先生への追悼 前会長・中谷瑾子先生のご逝去」日本生命倫理学会ニューズレターNo.28(2004年9月)2～3頁

「追想の中谷瑾子先生」三田評論1072号(2004年10月)88頁

荒井勉・池上政幸・井田良・高橋宏志・戸松秀典・松岡久和「(有斐閣法律講演会2004)これからの司法試験・司法修習の理想を語る」法学教室289号(2004年10月)4～28頁

〔書評〕甲斐克則『安楽死と刑法』（医事刑法研究第1巻）年報医事法学19号（2004年10月）208～213頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）『三省堂新六法 平成17年版』（三省堂、2004年10月）

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）『大きな活字の三省堂新六法 平成17年版』（三省堂、2004年10月）

Juristenausbildung in Japan oder: Juristische Fakultäten ohne Ausbildung von Juristen, Keio Law Review, No. 10, 2004, S. 45-54.

### 【2005年】

新司法試験考査委員（2007年まで）

日本学術会議会員（2014年まで）

〔生命の法的保護をめぐる根本問題〕慶應義塾大学教養研究センター（編）『生命の教養学へ：科学・感性・歴史』（慶應義塾大学出版会、2005年2月）42～66頁

〔書評〕山口厚（著）『刑法各論』書齋の窓542号（2005年3月）43～47頁

〔判例の動き—刑法〕『判例セレクト2004（法学教室294号別冊付録）』（2005年3月）27～28頁

〔講演〕量刑をめぐる理論と実務」司法研修所論集113号（2005年3月）203～238頁

〔法システムの『パッチワーク化』に抗う—古くて新しいドイツ法の魅力（特集 ドイツ再発見）〕三田評論1078号（2005年4月）26～31頁

井田良・小幡純子・酒巻匡・千葉恵美子・山下友信・山野目章夫「法科大学院で教えて感じたこと—指導者座談会（特集 法科大学院で学ぶ）」法学教室295号（2005年4月）26～49頁

〔交通犯罪と道路交通法改正（特集 交通犯罪）〕刑法雑誌44巻3号（2005年4月）410～417頁

高橋則夫・伊東研祐・井田良・杉田宗久『刑法総論 法科大学院テキスト』（日本評

論社、2005年4月)

『刑法総論の理論構造』(成文堂、2005年6月)

「過失犯理論の現状とその評価」研修686号(2005年8月)3～16頁

川端博・井田良「中止犯論の現在と課題」川端博『現代刑法理論の現状と課題』(成文堂、2005年8月)

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂(編)『三省堂新六法 平成18年版』(三省堂、2005年10月)

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂(編)『大きな活字の三省堂新六法 平成18年版』(三省堂、2005年11月)

『基礎から学ぶ刑事法〔第3版〕』(有斐閣、2005年12月)

指宿信・井田良・夏井高人・山野日章夫(監修)いしかわまりこ・村井のり子・藤井康子(著)『リーガル・リサーチ〔第2版〕』(日本評論社、2005年12月)

## 【2006年】

フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞受賞

「人の出生時期をめぐる諸問題(講座・刑法各論の最新争点〔第1回〕)」刑事法ジャーナル2号(2006年1月)120～127頁

「終末期ケアの法的ルール(特集 超高齢社会の終末期ケア)」病院65巻2号(2006年2月)110～114頁

「変革の時代における刑事法学の在り方」学術の動向11巻3号(2006年3月)56～59頁

「判例の動き—刑法」『判例セレクト2005(法学教室306号別冊付録)』(2006年3月)27～28頁

「人の『死』とその判定基準(講座・刑法各論の最新争点〔第2回〕)」刑事法ジャーナル3号(2006年3月)130～135頁

井田良・神田宏・武田誠・野崎和義・松村格『刑法各論』（ミネルヴァ書房、2006年3月）

「法定刑の引上げとその正当化根拠」小林充先生佐藤文哉先生古稀祝賀刑事裁判論集刊行会（編）『小林充先生・佐藤文哉先生古稀祝賀刑事裁判論集（上）』（判例タイムズ社、2006年3月）263～278頁

井田良・内海朋子・飯島暢・大山徹・野村和彦・照沼亮介・南由介・佐藤拓磨『よくわかる刑法』（ミネルヴァ書房、2006年4月）

山口厚・井田良・佐伯仁志『理論刑法学の最前線Ⅱ』（岩波書店、2006年5月）

- ・「コメント（生命の保護）」〔40～47頁〕
- ・「刑法と民法の関係」〔49～81頁〕
- ・「コメント（詐欺罪の理論的構造）」〔142～148頁〕
- ・「コメント（文書偽造罪の現代的展開）」〔174～178頁〕
- ・「司法作用の刑法的保護」〔185～212頁〕
- ・「コメント（不可罰的事後行為と共罰的事後行為）」〔252～260頁〕

田口守一・井上正仁・井田良・椎橋隆幸（編）『犯罪の多角的検討—渥美東洋先生古稀記念』（有斐閣、2006年5月）

「臓器移植に関する法的規制の在り方をめぐって」田口守一ほか（編）『犯罪の多角的検討—渥美東洋先生古稀記念』（有斐閣、2006年5月）21～43頁

「日本の安楽死裁判」学術の動向11巻6号（2006年6月）39～44頁

「越境犯罪と刑法の国際化—問題の素描」齊藤豊治・日高義博・甲斐克則・大塚裕史（編）『神山敏雄先生古稀祝賀論文集（第1巻）過失犯論・不作為犯論・共犯論』（成文堂、2006年6月）669～682頁

「何が法定刑の引上げを正当化するか（特集 法定刑の改正の理論的検討と実務への影響）」刑法雑誌46巻1号（2006年6月）21～31頁

「自殺関与罪と同意殺人罪（講座・刑法各論の最新争点〔第3回〕）」刑事法ジャーナル4号（2006年7月）133～142頁

「第36条 正当防衛」川端博・西田典之・原田國男・三浦守（編）『裁判例コメン

タール刑法（第1巻）』（立花書房、2006年7月）239～283頁

「越境犯罪と刑法の国際化—問題の素描」ハンス・ペーター・マルチュケ・村上淳一（編）『グローバル化と法—〈日本におけるドイツ年〉法学研究集会』（信山社、2006年9月）165～177頁

「3%ヌペルカイン事件（最判昭和28年12月22日）」『医事法判例百選』（2006年9月）160～161頁

慶應義塾大学法学部（編）『語り継ぐ三田法学の伝統』（慶應義塾大学出版会、2006年9月）

- ・「中谷瑾子先生（師を語る—明治・大正編—）」〔68～72頁〕
- ・「私の研究紹介」〔241～242頁〕
- ・宮澤浩一・井田良「刑事法（三田法学の現在）」〔414～429頁〕

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）『三省堂新六法 平成19年版』（三省堂、2006年10月）

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）『大きな活字の三省堂新六法 平成19年版』（三省堂、2006年10月）

「量刑をめぐる最近の諸問題」研修702号（2006年12月）3～18頁

Korruptionsdelikte und ihre Bekämpfung aus japanischer Sicht, in: Andrzej J. Szwarz (Hrsg.), Das dritte deutsch-japanisch-polnische Strafrechtsskolloquium der Stipendiaten der Alexander von Humboldt-Stiftung. Aktuelle Probleme des deutschen, japanischen und polnischen Strafrechts, Poznan 2006, S. 231-242.

## 【2007年】

「刑事実体法分野における実務と学説（特集 実定法諸分野における実務と学説）」法律時報79巻1号（2007年1月）43～49頁

井田良（訳）Hans Joachim Hirsch「ドイツにおける理論刑法学の現状について（外国刑事法学事情）」刑事法ジャーナル6号（2007年1月）49～62頁

「傷害の概念をめぐる（講座・刑法各論の最新争点〔第4回〕）」刑事法ジャーナル6号（2007年1月）110～119頁

「判例の動き—刑法」『判例セレクト 2006（法学教室 318 号別冊付録）』（2007 年 3 月）  
27～28 頁

「わが国における量刑法改革の動向」慶應法学 7 号〔平良木登規男教授退職記念号〕  
（2007 年 3 月）1～18 頁

井田良（訳）Hans Joachim Hirsch「ヨーロッパ諸国の刑法の相互調和をめぐる諸問題」  
慶應法学 7 号〔平良木登規男教授退職記念号〕（2007 年 3 月）89～107 頁

「（講演）法科大学院と新司法試験の現状と将来」青山法学論集 48 巻 4 号（2007 年 3  
月）69～88 頁

井田良・岡上雅美「概説 ドイツ刑法典の歴史とその特色」法務省大臣官房司法法制  
部（編）『ドイツ刑法典』（法曹会、2007 年 4 月）1～14 頁〔法務資料第 461 号〕

「社会の変化と刑法」三井誠・中森喜彦・吉岡一男・井上正仁・堀江慎司（編）『鈴  
木茂嗣先生古稀祝賀論文集（上）』（成文堂、2007 年 5 月）1～17 頁

『刑法各論（新・論点講義シリーズ 2）』（弘文堂、2007 年 5 月）

阿部純二（編）『基本法コンメンタール 改正刑法〔第 3 版〕』（日本評論社、2007 年 5  
月）

・宮澤浩一・井田良「通貨偽造の罪」〔190～195 頁〕

・同「文書偽造の罪」〔196～209 頁〕

・同「有価証券偽造の罪」〔210～213 頁〕

『変革の時代における理論刑法学』（慶應義塾大学出版会、2007 年 7 月）

「犯罪の予防と処罰（警察政策フォーラム 犯罪予防の法理）」警察学論集 60 巻 8 号  
（2007 年 8 月）48～54 頁

「終末期医療と刑法（特集 医療と法）」ジュリスト 1339 号（2007 年 8 月）39～46 頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）  
『三省堂新六法 平成 20 年版』（三省堂、2007 年 10 月）

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）



『大きな活字の三省堂新六法 平成 20 年版』（三省堂、2007 年 10 月）

高橋則夫・伊東研祐・井田良・杉田宗久『刑法総論 法科大学院テキスト〔第 2 版〕』（日本評論社、2007 年 10 月）

西田典之・山口厚・佐伯仁志（編）『刑法の争点（新・法律学の争点シリーズ 2）』（2007 年 10 月）

・「行為論」〔16～17 頁〕

・「処分行為（交付行為）の意義」〔182～183 頁〕

井田良・小池信太郎（訳）Franz Streng「ドイツにおける量刑—その概要と現代的課題」慶應法学 8 号（2007 年 10 月）123～162 頁

五十子敬子（編）『医をめぐる自己決定—倫理・看護・医療・法の視座—』（イウス出版、2007 年 12 月）

・「（基調講演）医療とインフォームド・コンセントの法理」〔129～138 頁〕

・井田良（司会）・酒井忠明（司会）・大久保奈保子・下山直人・須田清・古川利治「（シンポジウム インフォームド・コンセント）シンポジウム終了後討論」〔181～196 頁〕

Was bringt die sog. Internationalisierung des Strafrechts? - Eine Problembetrachtung aus japanischer Perspektive, in: Junichi Murakami, Hans-Peter Marutschke, Karl Riesenhuber (Hrsg.), Globalisierung und Recht, de Gruyter Berlin, 2007, S. 219-230.

## 【2008 年】

「ドイツ刑法の現状と比較刑法研究の今日的意義（特集 刑法典の百年）」ジュリスト 1348 号（2008 年 1 月）172～180 頁

「他人の行為の介入と因果関係（3）（最決平成 18 年 3 月 27 日）」『刑法判例百選 I 総論〔第 6 版〕』（2008 年 2 月）30～31 頁

「判例の動き—刑法」『判例セレクト 2007（法学教室 330 号別冊付録）』（2008 年 3 月）23～24 頁

指宿信・井田良・夏井高人・山野目章夫（監修）いしかわまりこ・藤井康子・村井のり子（著）『リーガル・リサーチ〔第 3 版〕』（日本評論社、2008 年 3 月）

「名義人の承諾と私文書偽造罪の成否（最決昭和 56 年 4 月 8 日）『刑法判例百選Ⅱ 各論〔第 6 版〕』（2008 年 3 月）204～205 頁

山田利行・櫻田香・井田良「ドイツ」法務総合研究所（編）『諸外国における性犯罪の実情と対策に関する研究—フランス、ドイツ、英国、米国』法務総合研究所研究部報告 38 号（2008 年 3 月）55～99 頁

井田良・大沢秀介・磯部力・小野正博「パネリスト発表及びパネルディスカッションの概要（警察政策フォーラム 犯罪予防の法理）」警察政策研究 11 号（2008 年 3 月）34～71 頁

「刑法を学ぶということ（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 1 回〕）」法学教室 331 号（2008 年 4 月）56～64 頁

「刑法は何のためにあるのか（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 2 回〕）」法学教室 332 号（2008 年 5 月）47～57 頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良（編）『理論刑法学の探究①』成文堂（2008 年 5 月）

「刑法の基本原則（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 3 回〕）」法学教室 333 号（2008 年 6 月）23～32 頁

「刑罰法規の解釈と適用（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 4 回〕）」法学教室 334 号（2008 年 7 月）23～32 頁

「犯罪論の基本的考え方（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 5 回〕）」法学教室 335 号（2008 年 8 月）26～37 頁

「構成要件をめぐって（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 6 回〕）」法学教室 336 号（2008 年 9 月）36～47 頁

石坂浩二・池上直己・井田良『終末期のケアを考える（慶應義塾創立 150 年ブックレット学問のすゝめ 21 Vol. 10）』（慶應義塾、2008 年 9 月）

「未遂犯と既遂犯（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 7 回〕）」法学教室 337 号（2008 年 10 月）27～39 頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）  
『三省堂新六法 平成 21 年版』（三省堂、2008 年 10 月）〔別冊付録として、井田  
良・藪中悠『裁判員ガイドブック』〕

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂（編）  
『大きな活字の三省堂新六法 平成 21 年版』（三省堂、2008 年 10 月）〔別冊付録と  
して、井田良・藪中悠『裁判員ガイドブック』〕

「故意と錯誤（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 8 回〕）」法学教室 338  
号（2008 年 11 月）26～39 頁

「違法性とその阻却（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 9 回〕）」法学教  
室 339 号（2008 年 12 月）24～36 頁

『講義刑法学・総論』（有斐閣、2008 年 12 月）

「最近の刑事立法をめぐる方法論的諸問題（特集 立法学の新展開 II 各論：刑事立法  
と労働立法の諸問題）」ジュリスト 1369 号（2008 年 12 月）54～63 頁

「ドイツ（法）とともに、ドイツ（法）を通して」Echos. 30 Jahre DAAD Außenstelle  
Tokyo, 2008, 52 頁～53 頁

Bier, Wein und Coca Cola in einem Glas: Humboldt-Preisträger Prof. Ida über Japans  
Vorbilder und den interdisziplinären Reiz des Strafrechts, uni kurier aktuell (Friedrich-  
Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg), Nr. 70, 2008, S. 15.

## 【2009 年】

オイゲン・ウント・イルゼ・ザイボルト賞受賞  
ザールラント大学より名誉博士号を授与される  
慶應義塾常任理事（2013 年まで）

『『講義刑法学・総論』執筆余話』書齋の窓 581 号（2009 年 1 月）12～16 頁

「責任とその阻却（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 10 回〕）」法学教室  
340 号（2009 年 1 月）42～52 頁

「正犯と共犯（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第 11 回〕）」法学教室 341

号（2009年2月）46～58頁

高山佳奈子・葛野尋之・井田良「コメント（特集 自由と安全と刑法）」刑法雑誌48巻2号（2009年2月）96～104頁

「〔巻頭言〕『制約なき思考』のすすめ」受験新報59巻3号（2009年3月）5頁

「犯罪論から刑罰論へ（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第12回〕）」法学教室342号（2009年3月）14～24頁

「判例の動き—刑法」『判例セレクト2008（法学教室342号別冊付録）』（2009年3月）25～26頁

「刑法による生命の保護（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第13回〕）」法学教室343号（2009年4月）65～75頁

「終末期医療と刑法（現代刑事法研究会〔第1回〕）」ジュリスト1377号（2009年4月）

- ・「〔基調報告〕終末期医療と刑法—終末期医療における刑法の役割」〔80～85頁〕
- ・山口厚・井田良・佐伯仁志・今井猛嘉・橋爪隆・有賀徹・原田國男「〔座談会〕終末期医療と刑法」〔86～109頁〕

「刑事立法の時代—現状と課題（特集 現代社会と刑事法の動向）」犯罪と非行160号（2009年5月）6～29頁

「刑法による身体の保護（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義 第14回）」法学教室344号（2009年5月）55～66頁

「『脳死は人の死』と定めよう—脳死再定義 あなたはどう考える（耕論）」朝日新聞2009年5月10日朝刊

「被害者の同意をめぐる諸問題（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義 第15回）」法学教室345号（2009年6月）64～74頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良（編）『理論刑法学の探究②』（成文堂、2009年6月）

山口厚・井田良・佐伯仁志・今井猛嘉・橋爪隆・高崎秀雄・樋口亮介「(座談会) 法人処罰 (現代刑事法研究会〔第2回])」ジュリスト 1383号 (2009年8月) 132～156頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂(編)『三省堂新六法 平成22年版』(三省堂、2009年10月)〔別冊付録として、井田良・藪中悠『裁判員ガイドブック2010』〕

「刑事過失の認定をめぐる諸問題」法曹時報 61巻 11号 (2009年11月) 1～41頁

山口厚・井田良・佐伯仁志・今井猛嘉・橋爪隆・岡田幸之・河本雅也「(座談会) 責任能力 (現代刑事法研究会〔第3回])」ジュリスト 1391号 (2009年12月) 89～115頁

井田良・佐伯仁志・橋爪隆・安田拓人(著)『刑事事例演習教材』(有斐閣、2009年12月)

Methodik der Rechtsfindung - insbesondere im japanischen Strafrecht, in: Jan C. Joerden et al. (Hrsg.), Vergleichende Strafrechtswissenschaft, Frankfurter Festschrift für Andrzej J. Szwarc zum 70. Geburtstag, Duncker & Humblot, Berlin 2009, S. 3-18.

## 【2010年】

「なぜ、何のための裁判員制度か(特集 人文・社会科学が発信する市民的課題)」学術の動向 15巻 2号 (2010年2月) 70～75頁

山口厚・井田良・佐伯仁志・今井猛嘉・橋爪隆・高山佳奈子・辰井聡子「(座談会) 生命倫理 (現代刑事法研究会〔第4回])」ジュリスト 1396号 (2010年3月) 102～125頁

『基礎から学ぶ刑事法〔第4版〕』(有斐閣、2010年3月)

「量刑判断の構造について」原田國男判事退官記念論文集刊行会(編)『新しい時代の刑事裁判—原田國男判事退官記念論文集』(判例タイムズ社、2010年4月) 453～467頁

「なぜ何のための裁判員制度か」安富潔・柳瀬昇・井田良・萩原能久・三上威彦・大沢秀介「(特別記事) 裁判員制度の理論的検証 (平成21年度慶應法学会シンポジ

ウム)』法学研究 83 巻 5 号 (2010 年 5 月) 91 ~ 128 頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良 (編)『理論刑法学の探究③』(成文堂、2010 年 6 月)

山口厚・井田良・佐伯仁志・今井猛嘉・橋爪隆・岡上雅美・川出敏裕「(座談会) 制裁の多様化 (現代刑事法研究会 [第 5 回])」ジュリスト 1403 号 (2010 年 7 月) 123 ~ 152 頁

「窃盗罪の保護法益をめぐって」研修 745 号 (2010 年 7 月) 3 ~ 20 頁

井田良・田口守一・植村立郎・河村博 (編著)『事例研究刑事法 I 刑法』(日本評論社、2010 年 9 月)

・「第 2 部 各論 問題 1 俺のものは俺のもの?」[174 ~ 195 頁]

井田良・田口守一・植村立郎・河村博 (編著)『事例研究刑事法 II 刑事訴訟法』(日本評論社、2010 年 9 月)

「『法学教室』と私—法学教室創刊 30 周年記念」法学教室 361 号 (2010 年 10 月) 55 頁

山口厚・井田良・佐伯仁志・今井猛嘉・橋爪隆・島田聡一郎・渡辺咲子「(座談会) 背任罪 (現代刑事法研究会 [第 6 回])」ジュリスト 1408 号 (2010 年 10 月) 125 ~ 151 頁

永井憲一・浅倉むつ子・安達和志・井田良・柴田和史・広渡清吾・水島朝穂 (編)『三省堂新六法 平成 23 年版』(三省堂、2010 年 10 月)

「平成 22 年版犯罪白書を読んで」罪と罰 48 巻 1 号 (2010 年 12 月) 5 ~ 12 頁

「臓器移植と倫理 改正臓器移植法における死 (特集 臓器移植 脳死下における臓器移植を考える)」日本臨床 68 巻 12 号 (2010 年 12 月) 2223 ~ 2228 頁

Der Ruf nach einem schärferen Strafrecht und die Strafrechtswissenschaft in Japan, in: Matthias Jahn et al. (Hrsg.), Strafrechtspraxis und Reform, Festschrift für Heinz Stöckel zum 70. Geburtstag, Duncker & Humblot, Berlin 2010, S. 361-375.

**【2011年】**

『『社中』という思想』塾 269号（2011年1月）3頁

「自由とその保護（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第16回〕）」法学教室 364号（2011年1月）60～71頁

「財産犯総論（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第17回〕）」法学教室 365号（2011年2月）69～80頁

山口厚・井田良・佐伯仁志・今井猛嘉・橋爪隆・中谷雄二郎「（座談会）裁判員裁判と刑法解釈の在り方（現代刑事法研究会〔第7回・完〕）」ジュリスト 1417号（2011年3月）120～143頁

「財産犯各論（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義〔第18回〕）」法学教室 367号（2011年4月）67～78頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良（編）『理論刑法学の探究④』（成文堂、2011年5月）

「危険犯（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義 第19回）」法学教室 369号（2011年6月）76～84頁

井田良・丸山雅夫『ケーススタディ刑法〔第3版〕』（日本評論社、2011年6月）

「改正臓器移植法における死の概念」町野朔・山本輝之・辰井聡子（編）『移植医療のこれから』（信山社、2011年7月）17～25頁

「放火罪（ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義 第20回）法学教室 372号（2011年9月）62～72頁

「最近の刑法学の動向をめぐる一考察」法学研究 84巻9号〔宮澤浩一先生追悼論文集〕（2011年9月）211～236頁

井田良・城下裕二（編）『刑法総論判例インデックス』（商事法務、2011年10月）  
・井田良・城下裕二「判例の読み方・学び方」18～25頁

「(巻頭言) ヒルシュ教授のご逝去を悼む」刑事法ジャーナル 30 号 (2011 年 11 月) 2 頁

「量刑決定の構造」ヴォルフガング・フリッシュ・浅田和茂・岡上雅美 (編著) 『量刑法の基本問題—量刑理論と量刑実務との対話—』(成文堂、2011 年 11 月) 103 ~ 115 頁

Wirtschaftsstrafrecht, in: Harald Baum/Moritz Bälz (Hrsg.), Handbuch Japanisches Handels- und Wirtschaftsrecht, Carl Heymanns Verlag, Köln 2011, S. 1461-1487.

Neuere Entwicklungen im japanischen Strafrecht im Lichte gesellschaftlicher Veränderungen, in: Bernd Schünemann et al. (Hrsg.), Festschrift für Claus Roxin zum 80. Geburtstag, de Gruyter Berlin 2011, S. 1609-1622.

Der Kriminologe und Strafrechtler Kōichi Miyazawa - Sein Beitrag zur Entwicklung der japanischen Kriminalwissenschaften, Zeitschrift für Japanisches Recht, Nr. 32, 2011, S. 9-18.

Probleme der Ausweitung und Verschärfung des Strafrechts aus japanischer Sicht, in: Jan. C. Joerden/Andrzej J. Szwarc/Keiichi Yamanaka (Hrsg.), Das vierte deutsch-japanisch-polnische Strafrechtskolloquium der Stipendiaten der Alexander von Humboldt-Stiftung, Wydawnictwo Poznanskie, Poznan 2011, S. 72-82.

## 【2012 年】

エアランゲン＝ニュールンベルク大学より名誉博士号を授与される

「文書偽造罪 (ゼロからスタート☆刑法 “超” 入門講義 [第 21 回])」法学教室 376 号 (2012 年 1 月) 67 ~ 79 頁

「医療事故に対する刑事責任の追及のあり方」井上正仁・酒巻匡 (編) 『三井誠先生古稀祝賀論文集』(有斐閣、2012 年 1 月) 229 ~ 248 頁

「ドイツ刑法学の一時代の終焉 (国際欄)」刑法雑誌 51 卷 2 号 (2012 年 1 月) 170 ~ 172 頁

「風俗犯 (ゼロからスタート☆刑法 “超” 入門講義 [第 22 回])」法学教室 377 号 (2012 年 2 月) 57 ~ 68 頁



〔(講演) 裁判員裁判と量刑—研究者の立場からの提言—〕 司法研修所論集 122 号  
(2012 年 3 月) 197 ~ 227 頁

指宿信・井田良・山野目章夫(監修) いしかわまりこ・藤井康子・村井のり子(著)  
『リーガル・リサーチ [第 4 版]』(日本評論社、2012 年 4 月)

〔国家的法益の保護(ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義 [第 23 回])〕 法学教室 380 号 (2012 年 5 月) 77 ~ 88 頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良(編)『理論刑法学の探究⑤』(成文堂、2012 年 5 月)

〔特集の趣旨(特集 裁判員裁判と国民参与裁判)〕 刑事法ジャーナル 32 号 (2012 年 5 月) 3 頁

〔裁判員裁判と量刑(特集 裁判員制度 3 年の軌跡と展望—裁判員制度の課題)〕 論  
究ジュリスト 2 号 (2012 年 8 月) 59 ~ 69 頁

浅田和茂・井田良(編)『刑法(新基本法コンメンタール)』(日本評論社、2012 年 9 月)  
・『第 2 編 罪』解説 [207 ~ 209 頁]  
・「通貨偽造の罪」 [312 ~ 319 頁]

司法研修所(編)井田良・大島隆明・園原敏彦・辛島明『裁判員裁判における量刑  
評議の在り方について』(法曹会、2012 年 10 月) [司法研究報告書第 63 輯第 3 号]

〔事例の解決の方法論を学ぶ(ゼロからスタート☆刑法“超”入門講義 [第 24 回・  
最終回])〕 法学教室 387 号 (2012 年 12 月) 102 ~ 111 頁

Sicherheit versus Freiheit in der heutigen staats- und strafrechtlichen Diskussion Japans, in:  
Lorenz Schulz et al. (Hrsg.), Festschrift für Imme Roxin, 2012, S. 739-747.

Strafrechtsvergleichung als Kulturvergleich? – dargestellt am Beispiel der Versuchsstrafbarkeit,  
in: Franz Streng/Gabriele Kett-Straub (Hrsg.), Strafrechtsvergleichung als Kulturvergleich,  
2012, S. 23-37.

Alterskriminalität in Japan, in: Emil W. Plywaczewski (Hrsg.), Aktuelle Probleme des  
Strafrechts und der Kriminologie, Warszawa: Wolters Kluwer Polska 2012, S. 251-256.

Wissenschaftstransfer zwischen Deutschland und Japan, in: Robert Esser et al. (Hrsg.),  
Festschrift für Hans-Heiner Kühne, C. F. Müller 2012, S. 759-767.

**【2013年】**

法と教育学会理事（現在に至る）

第一東京弁護士会懲戒委員会委員（現在に至る）

チューリヒ大学客員教授

「『罪刑の均衡』とは何か（刑政時評）」刑政 124 卷 3 号（2013 年 3 月）66～67 頁

「〔巻頭言〕『個人化』の時代」刑事法ジャーナル 37 号（2013 年 3 月）3 頁

『刑法各論〔第 2 版〕』（弘文堂、2013 年 4 月）

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良（編）『理論刑法学の探究⑥』（成文堂、2013 年  
6 月）

「再考・死刑制度と被害者支援—各論文の解題を兼ねて（特集 死刑制度と被害者支  
援について考える）」法学研究 86 卷 6 号（2013 年 6 月）1～12 頁

「犯罪観の時代的変遷（刑政時評）」刑政 124 卷 7 号（2013 年 7 月）64～65 頁

井田良・榎本桃也・内海朋子・飯島暢・大山徹・野村和彦・照沼亮介・南由介・佐  
藤拓磨『よくわかる刑法〔第 2 版〕』（ミネルヴァ書房、2013 年 9 月）

「いわゆる関与形式三分法（共同正犯・教唆犯・幫助犯）をめぐって」研修 784 号  
（2013 年 10 月）3～12 頁

「処罰の早期化をめぐって（刑政時評）」刑政 124 卷 11 号（2013 年 11 月）54～55 頁

『基礎から学ぶ刑事法〔第 5 版〕』（有斐閣、2013 年 12 月）

『入門刑法学・総論』（有斐閣、2013 年 12 月）

『入門刑法学・各論』（有斐閣、2013 年 12 月）

Die strafrechtliche Verantwortlichkeit des Arztes wegen eines Behandlungsfehlers nach

japanischem Recht, in: Jürgen Stamm (Hrsg.), Festschrift für Helmut Rübmann, juris GmbH Saarbrücken, 2013, S. 711-720.

## 【2014年】

国際刑法学会（AIDP）理事（現在に至る）

フンボルト財団学術参与（現在に至る）

日本フンボルト協会常務理事（現在に至る）

パッサウ大学客員教授

「刑法理論の深化・発展とその学び方—インタビュー（法学教室 400号記念特集 法学を学ぶために）」法学教室 400号（2014年1月）51～58頁

井田良・太田達也（編）『いま死刑制度を考える』（慶應義塾大学出版会、2014年2月）

「いま死刑制度とそのあり方を考える」井田良・太田達也（編）『いま死刑制度を考える』（慶應義塾大学出版会、2014年2月）1～30頁

「日本人の死生観と刑法（刑政時評）」刑政 125巻3号（2014年3月）78～79頁

「医療事故と刑事過失論をめぐる一考察」高橋則夫・川上拓一・寺崎嘉博・甲斐克則・松原芳博・小川佳樹（編）『曾根威彦先生・田口守一先生古稀祝賀論文集（上巻）』（成文堂、2014年3月）599～620頁

「チーム医療と信頼の原則—北大電気メス事件（札幌高判昭和51年3月18日）」『医事法判例百選〔第2版〕』（2014年3月）152～153頁

「外国法（学）の継受という観点から見た日本の刑法と刑法学」早稲田大学比較法研究所（編）『日本法の中の外国法—基本法の比較法的考察—』（成文堂、2014年3月）139～161頁

「再論・終末期医療と刑法」岩瀬徹・中森喜彦・西田典之（編集代表）『刑事法・医事法の新たな展開 町野朔先生古稀記念（下巻）』（信山社、2014年3月）131～145頁

「行為を論じる意味（講座・刑法総論の基本問題〔第1回〕）」受験新報 64巻5号（2014年4月）4～11頁

「違法性の実質とは（講座・刑法総論の基本問題〔第2回〕）」受験新報 64 巻 7 号  
（2014 年 6 月）4～10 頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良（編）『理論刑法学の探究⑦』（成文堂、2014 年  
6 月）

「医療事故と刑事責任（刑政時評）」刑政 125 巻 7 号（2014 年 7 月）76～77 頁

井田良・松原芳博（編）『立法学のフロンティア 3 —立法実践の変革』（ナカニシヤ  
出版、2014 年 7 月）

・井田良・松原芳博「序 各法領域の立法実践とその改革の方途——各論文の解題を  
兼ねて」〔3～17 頁〕

・「近年における刑事立法の活性化とその評価」〔97～122 頁〕

「実行行為について（講座・刑法総論の基本問題〔第3回〕）」受験新報 64 巻 9 号  
（2014 年 8 月）4～10 頁

「共謀共同正犯（2）—スワット事件（最決平成 15 年 5 月 1 日）」『刑法判例百選 I 総  
論〔第7版〕』（2014 年 8 月）154～155 頁

「不正融資の借り手側の責任（最決平成 15 年 2 月 18 日）」『刑法判例百選 II 各論〔第  
7 版〕』（2014 年 8 月）148～149 頁

野田進・松井茂紀（編）『新・シネマで法学』（有斐閣、2014 年 9 月）

・「刑事裁判における真実—『それでも僕はやってない』」〔223～238 頁〕

・「刑罰という名の殺人—『デッドマン・ウォーキング』」〔263～276 頁〕

「因果関係論の現状（講座・刑法総論の基本問題〔第4回〕）」受験新報 64 巻 11 号  
（2014 年 10 月）4～10 頁

「グランドセオリーの衰退（刑政時評）」刑政 125 巻 10 号（2014 年 10 月）58～59 頁  
井田良・高橋則夫・只木誠・中空壽雅・山口厚（編）『川端博先生古稀記念論文集  
（上巻）・（下巻）』（成文堂、2014 年 10 月）

「裁判員裁判の量刑評議における裁判官と裁判員の役割分担と協働」井田良ほか（編）  
『川端博先生古稀記念論文集（下巻）』（成文堂、2014 年 10 月）733～744 頁

「詐欺罪における財産的損害について」法曹時報 66 卷 11 号（2014 年 11 月）1～28 頁

「故意と錯誤の理論（講座・刑法総論の基本問題〔第 5 回〕）」受験新報 65 卷 1 号（2014 年 12 月）1～9 頁

井田良・佐伯仁志・橋爪隆・安田拓人『刑事事例演習教材〔第 2 版〕』（有斐閣、2014 年 12 月）

Über den strafrechtlichen Schutz des Lebens in Japan, Martin Heger et al. (Hrsg.), Festschrift für Kristian Kühl, CH.Beck 2014, S. 763-776.

Ein Plädoyer für eine interdisziplinäre Strafrechtswissenschaft, Zeitschrift der Zürcher Jusstudierenden, Dezember 2014, S. 52-53.

Über das Internetstrafrecht in Japan, in: Emil W. Plywaczewski (Hrsg.), Aktuelle Probleme des Strafrechts und der Kriminologie, Warszawa: C.H.Beck 2014, S. 54 ff.

#### 【2015 年】

ドイツ連邦共和国大統領より功勞勲章（功勞十字小綬章）を授与される

大学基準協会大学評価委員会委員（2017 年 3 月まで）

日本臓器移植ネットワーク理事（現在に至る）

1853 年創刊の刑法専門雑誌（月刊）ゴルトダンマー刑法雑誌〔Golddammer's Archiv für Strafrecht〕常任編集協力者（現在に至る）

「過失犯をめぐって（講座・刑法総論の基本問題〔第 6 回〕）」受験新報 65 卷 3 号（2015 年 2 月）2～11 頁

井田良・丸山雅夫『ケーススタディ刑法〔第 4 版〕』（日本評論社、2015 年 2 月）

「〔巻頭言〕性犯罪に関する罰則のあり方の検討」刑事法ジャーナル 43 号（2015 年 2 月）3 頁

「性犯罪処罰規定の改正についての覚書」慶應法学 31 号〔安富潔教授退職記念号〕（2015 年 2 月）43～60 頁

「違法性とその阻却（講座・刑法総論の基本問題〔第 7 回〕）」受験新報 65 卷 5 号

(2015年4月) 2～11頁

「責任の概念と内実（講座・刑法総論の基本問題〔第8回〕）」受験新報65巻7号  
(2015年6月) 2～10頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良（編）『理論刑法学の探究⑧』（成文堂、2015年6月）

「まとめ—立法学研究のもつ意味と今後の課題」井上達夫・川崎政司・西原博史・齋藤純一・鈴木寛・高見勝利・山田八千子・井田良「立法学学術フォーラム—立憲民主政の変動と立法学の再編」法律時報87巻8号（2015年7月）71頁

井田良・田口守一・植村立郎・河村博（編著）『事例研究刑事法Ⅰ 刑法〔第2版〕』（日本評論社、2015年7月）

・「第2部 各論 問題1 俺のものは俺のもの？」〔172～197頁〕

・福崎伸一郎・井田良「第2部 各論 問題6 学園理事長の暴走」〔309～331頁〕

井田良・田口守一・植村立郎・河村博（編著）『事例研究刑事法Ⅱ 刑事訴訟法〔第2版〕』（日本評論社、2015年7月）

「未遂犯論の再検討（講座・刑法総論の基本問題〔第9回〕）」受験新報65巻9号  
(2015年8月) 2～8頁

「性犯罪の保護法益をめぐって」研修806号（2015年8月）3～14頁

「正犯概念を考える（講座・刑法総論の基本問題〔第10回〕）」受験新報65巻11号  
(2015年10月) 6～13頁

「共同正犯とは何か（講座・刑法総論の基本問題〔第11回〕）」受験新報66巻1号  
(2015年12月) 2～9頁

Über die „Entphilosophierung“ der japanischen Strafrechtsdogmatik und ihre Folgen, in: Heike Jochum et al. (Hrsg.), Festschrift für Rudolf Wendt zum 70. Geburtstag, Duncker & Humblot 2015, S. 1195-1206.

Welzels Einfluss auf die ostasiatische Strafrechtsdogmatik, in: Wolfgang Frisch et al. (Hrsg.), Lebendiges und Totes in der Verbrechenslehre Hans Welzels, Mohr Siebeck 2015, S. 203-

Vorverlagerung der Strafbarkeit am Beispiel der Verfolgung von Cybercrime in Japan, in: Arndt Sinn (Hrsg.), Cybercrime im Rechtsvergleich, V&R unipress, Universitätsverlag Osnabrück, 2015, S. 189-202.

**【2016年】**

中央大学大学院法務研究科教授  
慶應義塾大学名誉教授

「刑罰の理論的基礎（講座・刑法総論の基本問題〔第12回・最終回〕）」受験新報66巻3号（2016年2月）9～17頁

「安楽死と治療中止」前田正一・氏家良人（編）『救急・集中治療における臨床倫理』（克誠堂出版、2016年2月）71～93頁

川端博・浅田和茂・山口厚・井田良（編）『理論刑法学の探究⑨』（成文堂、2016年6月）

「〔巻頭言〕『刑罰積極主義』の社会的背景」刑事法ジャーナル49号（2016年8月）3頁

井田良・井上宜裕・白取祐司・高田昭正・松宮孝明・山口厚（編）『浅田和茂先生古稀祝賀論文集（上巻）・（下巻）』（成文堂、2016年10月）

「『死刑不可能論』は可能か」井田良ほか（編）『浅田和茂先生古稀祝賀論文集（下巻）』（成文堂、2016年10月）529～541頁

井田良・城下裕二（編）『刑法各論判例インデックス』（商事法務、2016年10月）  
・井田良・城下裕二「判例の読み方・学び方」〔18～27頁〕

「総括コメント——刑法学の立場から」『応報の行方』法哲学年報（2016年10月）100～107頁

井田良・川出敏裕・高橋則夫・只木誠・山口厚（編）『新時代の刑事法学・椎橋隆幸先生古稀記念（上巻）・（下巻）』（信山社、2016年11月）

「殺人罪と死体遺棄罪の区別をめぐって」井田良ほか（編）『新時代の刑事法学・椎橋隆幸先生古稀記念（下巻）』（信山社、2016年11月）47～64頁

『講義刑法学・各論』（有斐閣、2016年12月）

井田良・佐渡島紗織・山野日章夫『法を学ぶ人のための文章作法』（有斐閣、2016年12月）